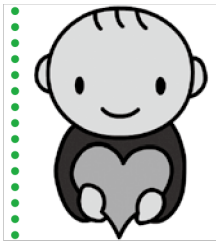
こ・こ・ら・ぼ
～こころのコラボレーション～



スクールサポーター
（臨床心理士）
小林　真理

必要なもの

日本各地の小中学校でタブレット端末（板状のコンピューター）を使用した学習の推進がはじまり、文部科学省も『一人一人の子供たちの能力や特性に応じた「個別学習」や、子供たちが教え合い学び合う「協働学習」の効果的な実施に加え、障害のある子供たちが障害による学習上または生活上の困難を改善・克服し、自立した日常生活や社会参加の実現につながる特別支援教育を実現することができる』と位置付け、『子供たちの主体的な学びや学力の向上を実現することを目指し、教育の情報化を推進していく』としています。

今回は、そのタブレットを利用したひとつのケースついて具体的にお伝えします。

県内のある小学校では、「読み障がい」といわれる子ども達に対して、通常学級や特別支援学級の両方において、タブレットを使用して授業をすすめる試みをしています。**「読み障がい」というのは、学習障がいの中のひとつで、文章や文字を追っているだけでは内容が理解できないというものです。文章や字面は追えているけど、内容が全く頭に入ってこないという方もいます。「読み障がい」では、音声で読んでもらえば内容や意味は頭に入るので、誰かがついていて文章を読んでくれれば、内容も理解できるし、問題に正確に答えることもできるのです。**この「誰かがついていて読み上げなければいけない」ということは、学習やテストの場面で常に誰かがついているということを指しています。しかし、実際には誰かがついて授業やテストをするということは難しい現状があります。一人で学習を進めるためにはどうしたら良いか。「読んでもらえばできる」のに、「読み」さえ補うことができれば「できる」のに…。

こういった子どもが自分のペースで学習を進めるために登場した支援ツールのひとつがタブレットなのです。タブレットにはあらかじめ使っている教科書を入れることによって（日本障がい者リハビリテーション協会からダウンロード可能）、その文章を読み上げてくれるようになっているのです。子どもはイヤホンを使い、机の上には教科書とノートとタブレットを置き、**「タブレットに読んでもらいながら、教科書を目で追い、内容を理解し授業に参加する」**ということをしていました。その姿はクラスのほかの子ども達と同じように、真剣に取り組んでいる様子そのものでした。この子どもはタブレットを導入する前は、机に顔を伏せてしまい「授業に取り組む」ということとは程遠い学習活動を送っていたそうです。

補うべき機能を適切なかたちで補う、必要とする人が有効なものを使うことは、特別なことではないのです。以前の『こころぼ』で視力矯正と服薬を例に挙げたことと同じですね。このケースでも補うべきことを必要なかたちで補うだけで、人に頼るのではなく自立した学習を体験でき、やる気を出し自信をもって学習しているのです。

新しいツールやしくみを導入しようとする時、その必要性は理解していても、どうしても「遊んでしまうのではないか」「本筋とは違う余計なことをするのではないか」と心配をしてしまいがちです。そしてその心配の声が大きいほど、「それを必要とする子」や多くの子どもにとってタイムリーな支援や学習ができないことも生じてしまいます。いろいろな支援ツールやしくみ、「補うために有効なもの」が登場している今、その必要性について一人でも多くの方が知っているといいですね。

引用文献：平成24年度文部科学白書　第10章　情報通信技術の活用の推進

植物園だより

絶滅が危惧される植物㉜

植物園では、絶滅が危惧される植物の保存にも取り組んでいます。

今回は、この季節に白色の花を開くクロミサンザシを紹介します。

クロミサンザシ

北海道、本州（長野県菅平）の山地に生える落葉高木です。

全国的に絶滅の危機に瀕しています。

湿地の開発、生育地の自然遷移等による減少が懸念されています。

植物園では、種子繁殖による増殖を試みています。

【問い合わせ】
植物園　☎48-3337

ルールには　ひとつひとつに　意味がある
「人権カルタ」より